

2009年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
頬を刺す寒風耳にうねりたる  
熱爛にまずぬくもってからのこと  
着膨れて弾む心を隠せざる  
音のなき雨に春めく土の色  
水仙に揺れてふれあふ光かな

横浜 下島 緑  
二度三度羽撃ちてもとの浮寝鴨  
橋の名の由来それぞれ都鳥  
いっぱいにしても落葉の籠軽し  
冬瓜の琥珀に葛をすこし濃く  
明日からはまた積もる日々年忘

藤沢 藤田 富子  
年の瀬や仲見世に絵馬掲げをり  
熱爛を少し所望の旅の宿  
頂きに真白なる富士冬に入る  
冬紅葉由緒ある寺訪ふツアー  
街道の松菰巻かれ年用意

さいたま 宮崎 美智子  
淡淡し十月桜の山路ゆく  
玉堂の秋一色の絵馬を掛くる  
孔子廟巡れり秋の吟行に  
下町の路地に吊るせる干大根  
凍空や屋根に真田の六文銭

町田 小森 まさ彦  
花愛でる鳥見て諷詠去年今年  
初仕事初富士見ゆる古デスク  
初電話変わらないかとまず問へり  
俳句時間増やすと誓かふ年初め  
薄氷に鯉の背びれの浮いてをり

2009年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
下萌の色に大地のはづむ艶  
日を風をのべる水面のあたたかさ  
万感の光をひらく初桜  
散りこめる花に深まりゆく流れ  
夕されば夜の匂となる桜

横浜 下島 緑  
水芹を育てて富士の水清し  
白魚舟漕ぐも掬ふも海人ひとり  
透けぬしが炊けば真白の白魚なる  
浦町はみな軒低く目刺干す  
菜の花や浦町軒を寄せて住む

藤沢 藤田 富子  
学園の径の明るき芽吹きかな  
浅き春流鎬馬といふ出会いあり  
春立つや島おだやかに波の綺羅  
石段に手摺り設けし春の宮  
潮騒に掛干若布ひよろひよると

さいたま 宮崎 美智子  
秩父路に落の臺買ふ一握り  
うぐいすの再び来るを切に待つ  
足許につむじ風立ち冴え返る  
虫喰の白菜笑う程の穴  
オカリナの曲に目つむる春日和

町田 小森 正彦  
つむじ風生まれて校庭の春  
多摩川の中洲より緑生まれ始む  
裸木の色代わりいて春隣なり  
猫柳怒濤の川を従へて  
窓の灯の消され春夜の生まれり

2009年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
岩肌も瀬音も風も緑なす  
舟に添ひ瀬音にまぎれ夏の蝶  
すきとほりゆく六月の瀬音かな  
すっぽりと万緑に呑みこまれをり  
十ほどは若返りたる夏帽子

横浜 下島 緑  
花は葉に鳩が水飲むにはたずみ  
雨雲に泰山木の花の白  
藤の花揺らして午後の風すこし  
ふたつめの春雷鳴らず秘めし恋  
胸深く埋もれ水あり朴の花

藤沢 藤田 富子  
れんげ草輪飾りにしてなつかしむ  
満開の花に酔ひたる人の波  
大空に香りを放つ白木蓮  
海沿いを走る単線のどけしや  
手すさびの仕事放りて春眠し

さいたま 宮崎 美智子  
満開の花の校庭人おらず  
師の墓前語り合ふ間の春日傘  
野の風にまるまる太る鯉のぼり  
傍に啼くうぐいすのまだ幼  
花吹雪一人占めせむ子の両手

町田 小森 まさ彦  
薫風や富士は日本一の山  
樺太は見へず卯波の立つばかり  
切れ上がる小股小股や神田祭  
裏年に当たる今年の柿若葉  
丸の内の常磐木落葉の吹きだまり

2009年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
灯を消してより闇涼し星涼し  
万緑の底よりにじみくる暑さ  
しずみゆく日を蛸の聲が追う  
涼しさを活けるお流儀知らずとも  
行く水に灯影のゆらぐ夜の秋

横浜 下島 緑  
校庭に終業の鐘ひつじ草  
河骨や水深ければ花沈み  
青梅雨や勾配ゆるき石畳  
せせらぎにかこまれてをり螢の夜  
七月の木洩れ日の斑の濃く散れる

藤沢 藤田 富子  
眼を病みてしばし苦痛の梅雨じめり  
終日を病院めぐり梅雨晴間  
雨音に今日は怠けて大朝寝  
老鶯の鳴く音ききつつ厨ごと  
地下街の格安サービス夏帽子

さいたま 宮崎 美智子  
京風に筍飯をうす味に  
桜桃忌いつもながらの雨であり  
うす紙のような芍薬花片かな  
梅雨最中すつく立てる紅あざみ  
夏まつりわれも江戸っ子豆しぼり

町田 小森 まさ彦  
朝取りが並ぶ食卓に帰省せり  
蔓影のとり忘れて大胡瓜  
木下闇の透けてはるけし富士の山  
蝮でて校地清掃終了す  
尻の泡深くもぐりて源五郎

2009年9～10月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子  
遠山の白く林檎の赤くなる  
しなやかにほどけ光となる芒  
ちりぢりに人散り散りに秋の声  
夜々の雨居待寝待の月を籠め  
うすき日を寄せて岸辺の秋深む
- 横浜 下島 緑  
咲き続くダリアの花にやや倦みし  
秋すでに生まれてをりぬ空の奥  
露地昏れて白粉花の夜を匂ふ  
秋刀魚網揚りて零る海の色  
戯れに引けば遠くで鳴る鳴子
- 藤沢 藤田 富子  
久々のビール胃の腑にこたえけり  
新涼の夢かうつつか心地良く  
盆灯笼鬼籍に入りし友偲ぶ  
年毎の廻り灯笼色あせて  
サーフィンの若さぶつける波頭
- さいたま 宮崎 美智子  
黒雲を抜け夕立に叩かるる  
盆供養秩父音頭の振りのよさ  
鈴虫の家族の端に声を上ぐ  
白き椅子避暑地の庭に人を待つ  
浅間嶺にかかる夏霧早失せぬ
- 町田 小森 まさ彦  
幹叩く音のみ聞こゆ秋の森  
鮭上る今を限りという一途  
吹き下ろす風を真っ赤に林檎園  
上り詰めて小さき畑の蕎麦の花  
猪垣の守りの中の野菜たち

2009年11～12月掲載分

- 習志野 大慈弥 爽子  
尖りつつ乾く十一月の風  
日のぬくみ吸うて枯れゆく蓮かな  
風を梳き星をこぼせる枯木立  
極月の人の流れにさからわず  
行年の祈りの経木流しかな
- 横浜 下島 緑  
月代のはや満月の形なる  
温泉の町の暮れ満月の町となる  
深更にして満月の空となる  
山裾に住めば親しき落葉雨  
このごろの甲斐なき仕事落葉掃
- 藤沢 藤田 富子  
鎌倉の老樹黄葉の日に映えて  
稜線を際立たせをり山静か  
つるべ落とし秋の夕べの淋しとも  
菊日和友の上梓を祝ひけり  
豊の秋黄金に光る穂波かな
- さいたま 宮崎 美智子  
狼の岩間に伏すをしかと見る  
史に残る囚人道路冷まじや  
紅葉する名を持つ岩を右左  
下戸の我注がるる熱き甲羅酒
- 町田 小森 まさ彦  
日比谷森の一木に色薄紅葉  
喧噪を絶って日比谷の紅葉かな  
人波に流れて終へしーの酉  
西の市の縁起熊手も銀座線  
雲の日の消えゆく時間暮の秋